“愛すべき小さな田舎”からの小さなたより

最終回 次はくまの木でお会いしましょう！

右　元株式会社奥村組専務執行役員
宮元　均

左　星ふる学校「くまの木」（栃木県塩谷郡塩谷町）
〔特定非営利活動法人　くまの木　里の暮らし〕
加納　麻紀子

栃木県塩谷町の廃校を活用した農村宿泊体験施設星ふる学校「くまの木」の事務局長として活躍されている加納麻紀子さんに、五年間にわたり子どもたちの自然との触れ合いや、地域住民との交流による農業・農村の魅力などを発信していただきました。

二四回目となる最終回に、これまでの執筆を振り返るとともに、これからの目標についてお話を伺いました。

宮元　五年間ご苦労様でした。二三回に亘って「愛すべき小さな田舎からの小さなたより」を発信して頂きました。本当にありがとうございました。執筆はいかがでしたか。

加納　当初は一年間四回書いて終了かな、と思っていたのですが、思いのほか長く続けさせていただきました。

「土地改良」には、㈳農村環境整備センター時代に一緒に仕事をさせていただいた方もたくさん登場されていますし、そういう方々に、自分の仕事のことだけでなく、塩谷町のこと、関係分野のこともいろいろ伝えたい！という思いがどんどん湧き上がってきて、本当にお便りをしたためる気持ちで書いていました。

宮元　土地改良誌の裏表紙に読者のご意見、ご感想を掲載している「クロスオーバー」欄があります。そこを読ませていただくと、全国に加納さんのファンができたように思います。具体的な反応はありましたか。

加納　「田んぼの学校」の研修会に参加された方など、懐かしい方からメールをいただいたり、「読んでますよ！」と声をかけていただいたりして、それは本当に嬉しかったです。㈳農村環境整備センター時代の仕事（「田んぼの学校」）が今の仕事にちゃんとつながっていますね、と言っていただいて、ああそうか、あの土台があってこうやって広げて進められているんだな、と自分でも改めて感じたりしました。

また、逆の話になりますが、題材にさせていただいた方に本誌をお届けすると、こんな立派な冊子に書いていただいて！と喜ばれることが多かったです。

「田んぼの学校」が原点

宮元　加納さんと出会ってから、はや、二四年になります。初めて出会ったのは一九九八年で㈳農村環境整備センターでした。私が研究第一部長で、加納さんは、私が発案した「田んぼの学校」を担当してくれました。私と一年間一緒に「田んぼの学校」を立ち上げて、その後、一〇年間「田んぼの学校」を育ててくれました。

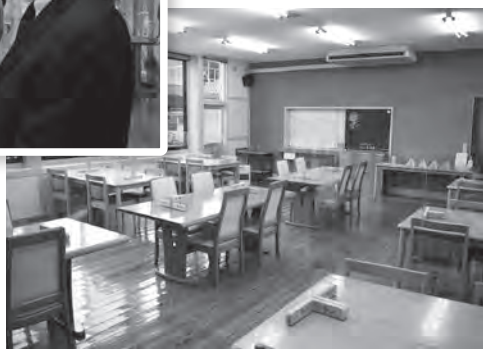
加納　町場育ちで農村の「の」の字も知らなかったわたしが「田んぼの学校」の担当として、農村に足を運ぶようになって、本当に世界がガラリと変わりました。田んぼまわりがこんなにおもしろい世界だったなんて全然知らなかった！　その衝撃と、田んぼまわりの世界をいろんな人と一緒に学んだり楽しんだりしたいなぁ、というのが原点で、それは今でも変わっていません。

また、宮元部長（当時）にくっついて仕事をさせていただく中で、仕事の仕方、人とのかかわり方、仲間の増やし方、プロジェクトの動かし方など本当にたくさんのことを学びました。

宮元　その後、私の後任の岩村部長が始めた「田んぼの生きもの調査」も担当されました。

加納　わたしは生きものの専門家ではありませんので、専門家ではない人、つまり誰にでもわかりやすく、誰でも安全に楽しく実施するにはどんなふうにしたらよいのか、という視点で「田んぼの生きもの調査」をかたちにしていく過程にかかわり、これもとてもいい経験になりました。実際に自分たちで何度もあれこれ試してやってみて、写真を撮り、調査方法のマニュアルを作りました。岩村部長も自ら熱心に道具を手作りされたりしていたことが懐かしく思い出されます。

宮元部長の元で「田んぼの学校」を担当していた当時は、毎週末のように、各地の現場、そして教育や環境、NPO活動など関係分野の研修やイベントなどに出かけていました。↙



↘ フットワークが軽くて、属性や立場の垣根なく、どんな人とでもすぐに打ち解ける、まさに愛されキャラの部長のお供はいつもわくわくして楽しかったです。そんな感じが今も続いています（笑）。

農をテーマにした体験活動というと、田植え、稲刈り、芋ほりが主だったところに、この「田んぼの生きもの調査」の普及で、そこに生息している生きものを調べるという活動も入るようになってきました。

栃木県の多面的機能支払交付金の活動では、生態系に配慮した活動が必須になっていて、「田んぼの生きもの調査」を実施している地区がとても多いんです。わたしの住んでいる地区でも育成会と連携して実施しています。私と夫がこの「田んぼの生きもの調査」の立ち上げにかかわっているとは、近所では誰も知らないと思います（笑）。

宮元　その後、二〇一〇年に、現在の「愛すべき小さな田舎」である、「塩谷町やすらぎの体験交流施設」（星ふる学校「くまの木」、以下「くまの木」）の事務局長にヘッドハンティングされました。デスクワークからフィールドワークを選ばれたわけですが、思い切った決断でしたね。

加納　「田んぼの学校」の当初から、栃木県のメダカ里親の会の活動に通わせていただいており、その縁でメダカ里親の会の中茎さんから情報を頂き、事務局長の公募に応募しました。

「田んぼの学校」にかかわる中で、やっぱり現場の人が一番かっこいいなぁ、すごいなぁと思っていたので、自分もそちら側にいくんだ!?とちょっと誇らしいような、でも現場では圧倒的にひよっ子だなぁとドキドキする気持ちもありました。

現場の仕事は、手足を動かして、頭も動かして、ハートも動かして、自分の全部を使ってする仕事です。そういう仕事ってすごくおもしろいし、健全な感じがします。いい仕事をさせてもらっているなぁと、ありがたく思っています。

宮元　「くまの木」周辺の、住民の方とのつながりも、順調に深まっていったようですね。

地元の方とご一緒させていただく機会は、教えていただくことばかり。昔のこと、地域のこと、農業のこと。手を動かしながらのおしゃべりの楽しいことと言ったら！

㈳農村環境整備センター時代の写真を発掘。なつかしい！若かった！

鍬も鎌も刈払機もつるはしも元気に振り回す現在の姿（笑）

加納　みなさんやさしくて、親切で、本当によくしていただいています。仕事柄地域の方とのかかわりが多いですし、子どもの学校などでの関係で広がるお付き合いもあります。「くまの木」が有名なおかげで、「くまの木にいます」と言うと、みなさん「ああ！」とすぐ分かってくださるので助かります。

宮元　「くまの木自然クラブ」のお子さんが、町役場に入り、この施設の担当になられたとか。

加納　「くまの木自然クラブ」に入っていて、高校時代はボランティアとしてかかわってくれていた子が塩谷町役場に就職し、「くまの木」の担当になるということがありました。うれしいですよね。「くまの木自然クラブ」も長く続いていますので、次は自然クラブに参加していた子が自分の子どもを自然クラブに送り込んでくれたら、と思っています。

「くまの木」の取組

宮元　「くまの木」で人気のアクティビティを教えてください。

加納　やはり星空観察、そして、うどんうち、季節限定ですが、魚のつかみ取りも人気があります。ちなみに冬期はみそづくりが人気で、おすすめです。町内産の大豆と麹で仕込むおみそは本当においしくて、みそづくりは毎年申し込みをいただくリピーターさんが多いですね。

宮元　「くまの木」で取り組まれた「森のようちえん」は、デンマークが発祥と聞いていますが、コンセプトが「田んぼの学校」によく似ていて素敵ですね。

加納　「森のようちえん」は、今、全国でとても盛んになってきています。常設型、イベント型など取組みのスタイルも様々です。「くまの木」ではデイキャンプのイベントとして実施しました。一般的に「森のようちえん」と言われている活動の中には、「田んぼの学校」とも言えるような活動もたくさんあります！

宮元　訪問するたびに、二人のお子さんが大きくなられるのを拝見していました。豊かな自然環境の中での子育ては、いかがですか。

加納　山があって川があって田んぼや畑が当たり前に身近にあって、人間以外の生きものがたくさんいて、直接体験がしっかりできるのは本当にいいですね。親の自己満足かもしれませんが、自然の中で過ごしている子どもの姿が好きですし、そういう子育てが楽しいです。子どもたちは野生児に育っています。

　豊かな自然環境にあっても、案外子どもたちの遊びはゲームが多かったり、という実態もあります。テレビもほとんど見ない、ゲームもスマホも与えていない我が家は間違いなく少数派です。

子どもたちが日常的に遊べるホンモノの川があることのありがたさ。水があればとりあえず入る。石があればとりあえずひっくり返す。生きものがいればとりあえず捕まえる。そしてなぜかまずにおいをかぐ。息子7才、娘2才の頃。

中学校3年生になった息子は、小さい子たちの水遊びを見守る側に。成長ってスバラシイ～。ちなみに彼の水遊びは釣りに移行しています。

娘の水遊びは校庭の水たまりでもOK。ぴちぴちちゃぷちゃぷどころではなく、いつも全身ザバーン！ちょっとした池にも靴のまま普通に入っていきます。

コロナ禍でも活動を止めない

宮元　㈳農村環境整備センターの仲間が、加納さんを応援するために、「くまの木」で同窓会をやるようになりました。私は、農水省を退職してクラッシックギターを始めたのですが、そこで、仲間と一緒に押しかけ演奏会をしました。八年間続きました。この二年間はコロナの影響で中断していますが、来年は再開したいと思っています。

加納　毎年恒例の行事でスタッフともども楽しみにしています。再開できる状況になることを心待ちにしています。元教室での小さなコンサートはとても雰囲気がよいですよね。子どもの体験学習の施設と思われがちですが、大人の方のレクリエーションや企業研修などでご利用いただくこともあるんです。

宮元　この二年間は、コロナの影響で、「くまの木」を始め全国の自然学校の運営が難しくなっていると思います。どのような状況ですか。

加納　どこも厳しい状況が続いていますが、全国の仲間たちはオンラインを活用したり、感染症対策を徹底しながらプログラム提供を再開したりと、〝体

験を止めない〟ために知恵を絞り、工夫をしながらがんばっています。団体やフィールドは違っても、コロナ禍の社会だからこそ、ますます生きる力を育む自然体験活動は重要で、感性や身体性をしっかりと育んでいかなければ、という思いはみな同じです。

一四年後のお祝いが目標

宮元　「くまの木」における、加納さん自身の今後の抱負を聞かせてください。

加納　星ふる学校「くまの木」は、今年開業二〇周年を迎えます。地域の方が、閉校しても校舎は残して活用したいと願って、検討を重ね、行政とも一緒になって力を出し合って今のような宿泊型体験学習施設となりました。わたしがかかわっているのはその後半一〇年ですが、二〇年間この事業を続けてこられたことを地域の方々と一緒に喜べるような企画（校歌復刻プロジェクト）を考えています。

地域の方が自分たちの選択とその後の事業展開を改めて誇りに思えるように、その企画をみんなで楽しみながら成功させたいというのがまず直近の抱負です。

「くまの木」の運営母体（わたしの所属している団体）は、くまの木里の暮らし、という名称です。〝里の暮らし〟には、自然の恵みをいただきながら世代をつなぐ営みという意味を込めています。〝里の暮らし〟は都市部・農村部にかかわらずこれからの生き方や暮らし方のひとつのヒントになると思っています。「くまの木」がそんな雰囲気を体感できる場所になるように、町内外いろいろな方と一緒に工夫を重ねていきたいです。

「くまの木」の東棟は昭和十年に建てられているので、今年八六歳です。そうやって運営を続けて、一四年後に東棟一〇〇歳のお祝いをするぞ、ということを一つの目標にしています。

宮元　今日はありがとうございました。最後に、全国の「愛すべき小さな田舎」からの小さなたよりの読者の皆さんに一言お願いします。

加納　五年間ありがとうございました。農村はみなさんの日々のお仕事の場であると思いますが、お仕事とは違った形でものんびりと足を運んでいただけたらと思います。安心して旅行を楽しめる状況になりましたら、是非「くまの木」をお訪ねください！お待ちしています。

このひと時、みんな童心に返って無邪気に楽しんでしまうのは、元校舎の不思議な力もあるような。木造校舎とクラッシックギター、素敵です。

校門近くの石碑に刻まれている校歌の一節。ただ「すくすくと」ではなく、「あらしに耐え」ての「すくすく」なのがおもしろいなぁと思っていたのですが、今の「くまの木」にはこの言葉が沁みます……。

24年前の上司にインタビューをしていただけるなんていう幸せな企画に感謝しかありません。ありがとうございました！

加納麻紀子（かのうまきこ）

NPO法人くまの木里の暮らし事務局長

神奈川県藤沢市出身。東京学芸大学教育学部卒業、(社)農村環境整備センター（現、(一社)地域環境資源センター）に入職。環境教育「田んぼの学校」、田んぼの生き物調査、田園自然再生活動コンクール等に携わる。二〇一〇年NPO法人くまの木里の暮らし事務局長に転職。現在、塩谷町の教育委員、グリーンツーリズム推進協議会幹事、栃木県の農村地域資源保全向上対策委員会委員、グリーン・ツーリズムネットワーク副代表などを務める。